

Title	大阪大学の基礎セミナーの特質
Author(s)	山成, 数明; 秦, 由美子
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 3 P.17-P.21
Issue Date	2007-03-30
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/5826
DOI	
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学の基礎セミナーの特質

山成 数明・秦 由美子

Top-class First-year Seminar at Osaka University

Kazuaki YAMANARI and Yumiko HADA

Small-group teaching plays a very important role in Japanese university education. In December 2006 a Special GP Symposium entitled “Small-group teaching for first-year university students and a ‘change of direction in learning’” was held at Tohoku University, and reports were given of examples showing how small-group teaching was being implemented at 5 universities.

Looking back on a first-year seminar that was organized at Osaka University with the aim of making a comparison of these examples of small-group teaching as presented at the symposium, we were able once again to appreciate the uniqueness and superlative qualities of this form of education, and have set down our impressions in this paper.

はじめに

2006年の年末12月7日(木)に、仙台ガーデンパレスにおいて開催された東北大学の特色GPシンポジウムに大阪大学も招かれ参加することとなった(写真1)。このシンポジウムは“大学における初年次少人数教育と「学びの転換」”をテーマに、他大学における少人数教育の実践例を通して、「初年次少人数教育」を起点とする「大学での学び」の構築とその課題を探っていくために開催されたものである。いろいろな大学の実践例を知ると共に、大阪大学の基礎セミナーのユニークさと卓越性を改めて再認識したので、提示させていただきたい。



1. 他大学の少人数教育

まず、はじめに個別大学の初年次少人数教育について例証していく(シンポジウム発表順)。

① 北海道大学

北大の少人数教育は、1969年の外国語演習として始まり、1985年に一般教育演習となり、1995年には開講コマ数も50から120へ増加した。2001年から20名以下の完全少人数教育を実現しており、現在では170コマ3000名の規模となっている。一般教育演習は一部の学部のみで必修であり、新入生2500名のうち500名は未履修、1000名は複数履修している。

教員の担当については、教員数の1/10を開講することが要請されており、教育内容については「専門のゼミ」から「文章の書き方」まで多種多様であり、グループ学習や能動学習がFDの結果増加している。TAは教養教育に延べ800名使われており、“TAの教育はFDの第一歩”と重視されている。

学生からは、この一般教育演習を通して、幅広い知識や新しいものの見方を身につけることができたと高い評価を得ている。しかしながら、2006年に単位の上限を設定した(21~23単位;いわゆるキャップ制の導入)結果、1000名ほど受講者が減ったということである。

② 名古屋大学

自立的学習能力の育成と読み・書き・話すコモン・ベーシックの訓練を目的として、名大では基礎セミナーが必修科目となっている。文系では、2コマが必修、理系では1コマが必修（選択で1コマ）である。12名という少人数クラスを実現するため、前期で196科目、後期で77科目が開講されており、すべてのコマに1名のTAが配置されている。

基礎セミナーの授業評価アンケート結果は、ほとんどの評価項目で各科目の平均値よりかなり高い数値となっている。また、教員と学生の間で授業に対する認識ギャップは一般的に小さかったが、評価の方法・基準、教室の広さ・授業環境については教員と学生間の意見には大きな差が見られた。

今後、少人数教育での集中的な資源投入に伴うしわ寄せとして、多人数によるオリエンテーション科目のあり方を検討することが課題となっている。

③ 京都大学

京大の「新入生向け少人数セミナー」はポケットゼミと通称され、1997年から始まった。このポケットゼミは、「学問のすすめ」であり高校から大学に入学してくる新入生への転換・導入教育と位置づけられている。

単位は2単位で、一年前期だけに開講されており、2003年度で134科目があった。内容は、必ずしも概論や入門的なものではなく、「文学における遊技と社会性」（総合人間学部）「意識とは何か」（文学部）「世界を変えた式」（工学部）など、担当教員の興味が強く反映した内容となっている。

新入生の約6割が受講を希望するが、実際には4割の1136名の学生しか受講できていない。抽選にはずれた学生からは、開講授業数の拡大や後期開講の実現を望む不満の声が出ている。開講については、委員会が毎年開講教員を募集する形で進められている。

④ 長崎大学

長崎大学では、平成14年度より初年次前期の必修科目（共通基礎科目）として少人数教育である教養セミナーが開講された。1クラス10名程度の少人数で、テーマは教員と学部混在型に割り当てられた学生との話し合いで決めるのが最大の特徴である。テーマとしては、「長崎の伝統とその継承、後継問題」「ツシマヤマネコは守れるか」「夏のお菓子について」「ハウステンボスの衰退と再生」「マイナスイオンについて」「七福神」等が選ばれ

た。

教養セミナーに対する学生の授業評価、教員アンケート結果は概ね良好であったが、実施に関して特に教員側から多様な要望と意見が寄せられている。それら意見の中で目立った事項は、まず、1クラス10名編成のため毎年160名余りの教員負担が大きいこと、選ばれたテーマの内容、学部混成型について学部毎に教育目標が違うので教育効果が上がらないこと、学部によってレベルが違うので授業の進め方が困難なこと等である。

⑤ 東北大学

東北大学の基礎ゼミは平成12年に誕生し、各部局の教員数により担当割り当てを行い、現在154テーマが開講されている。特徴としては、シラバスを入学前に配付し受講テーマの希望調査を行い、1クラス20名以下の学部横断型クラス編成とし、開講も月3～5限、木5限に開講して希望するテーマの履修を保障している。担当教員には事前研修FDが実施され、趣旨の徹底と情報交換がなされている。必修科目で受講生は2550名、実質的な担当教員数は200名であり、名誉教授も10テーマを担当している。

テーマとしては、「人類と病原微生物の攻防」（医、実習）「自分のルーツを探る」（東北アジア、調査）「生と死の境界を歩く」（文、野外）「25年後わたし達は何を食べているか」（生命科学、演習）「大地のうごきをさぐる」（理、実験）「来るべき宮城県沖地震に備えて」（工、演習）などがある。学生による授業評価アンケートは満足の度合いも高く、基礎ゼミで学んだ内容の公開発表も学生により主体的に行われている。

2. 少人数教育の課題

以上、各大学の報告に沿って、少人数教育の現状を簡単に見てきた。それらの特徴を表1にまとめた。各大学で実施している学生の授業評価アンケート結果からも明らかのように、いずれの少人数教育も大変高い評価結果を示している。

少人数セミナーは各種の条件に恵まれているので、教育効果が高いのはある意味では当然と言える。問題は、そこから教員と学生が何を学び発展させることができるかである。本当に、多人数教育で実現不可能なことを実現しているのかが問われている。

少人数教育で最も問題となってくるのは、担当者の問題である。上記のいずれの大学も、部局の教員数に応じ

表1. 他大学の少人数教育

大学	科目名	必修・選択	開講数	受講者	TA	特徴
北大	一般教育演習	選択	170	3000*	活用	20名以下 教員数の1/10の開講要請
名大	基礎セミナー	必修	前期196 後期 77	2240	セミナーに 1名	セミナー12名 多人数教育との組み合わせが課題
京大	ポケットゼミ	選択	134	1136		委員会で担当教員募集
長崎大	教養セミナー	必修	164	1640		学部毎に担当教員を決める テーマは学生と話し合いで決定
東北大	基礎セミナー	必修 選必	154	2550	活用	部局教員数で割り当て(名誉教授も担当) 20名以下

*2006年はキャップ制導入のため2000名に減少。

た負担を義務化されている。少人数教育を理想的には1セメスターではなく通年で実施したいと考えても、担当者の問題で挫折する。少人数になればなるほど教員数が増えて、教育負担が増すことになるからである。名古屋大学で検討されているように、少人数教育での集中的な資源投入に伴うしわ寄せとして、多人数によるオリエンテーション科目のあり方をセットで検討することがますます重要となっているといえよう。

3. 大阪大学の基礎セミナー

ここでは、大阪大学の少人数教育について私見を述べる。上記の各大学の内容と比較しても、大変ユニークで優れた内容であることが理解されよう。

大阪大学の全学共通教育科目の中で、小人数教育に該当する科目としては全学部を対象とした基礎セミナー(選択科目)がある。この他に、理学部の専門科目として、1年生を対象とした学科単位の小人数セミナー(木曜企画)があるが、ここではその詳細については触れない(文献1参照)。基礎セミナーは、教養部が廃止された翌年の平成6年から始まっており、13年の長い歴史を持つ。

この科目は、シラバスにあるように「基礎セミナーは少人数の学生が教員を囲んで、一つのテーマについて質疑・応答・討論をする対話形式で進める授業科目である。基礎セミナーでは、学問の先達である教員と直に接しながら、教員の提示するテーマを通じて教員の研究分野や学究態度を学ぶと共に、人生の先輩としての教員の人生観・世界観などを摂取することも可能である。また、実際に実験装置を使って研究をしてみる体験的課題追求型授業もある」とその目標が示されている。つまり、大

学における学修と生活へのオリエンテーションを与え、学修意欲と創造性を刺激する科目と言えよう。

基礎セミナーがスタートした平成6年には、すでに165科目が開講されていた。平成18年度の基礎セミナーは、Iセメスターで120科目、IIセメスターで32科目、IIIセメスターで6科目が開講されており、この13年間で開講数はほぼ維持されている。今年度の受講学生は1687名(新生生の3分の2に相当)あり、平均すると1科目あたりの受講学生は10.9人であり、文字通りの小人数教育となっている。

大阪大学の基礎セミナーには3つのユニークな特徴がある。最大の特徴は、全学から希望する教員が自主的に授業を開講していることである。つまり、ボランティアベースで開講されている。したがって、基礎セミナーについては教育負担ウンヌンの不満話は出てこない。しかも、驚くべきことに実質的な担当教員数は520名程おり、他大学の担当教員数と比較しても2~3倍の数となる。小人数教育は教育効果も高く学生に評判が良いが、担当教員自身も基礎セミナーを通じて日常実践的なFDを体験していると言える。10年以上に渡って、毎年500名を越える教員が基礎セミナーを担当していることは、大変ポジティブな教育効果を潜在的に醸成していると評価できる。

授業内容についても、全く教員に一任されている。開講科目の一部を紹介すると、「楽器を作ろうー音の科学入門」「蛋白質や遺伝子を楽しもう」「自律走行ロボットの世界ー火星探査機から深海調査船まで」「クリティカルシンキングの技法」「不思議な日本語、『役割語』について調べる」「科学であそぼうー見てみよう暮らしの中の放射能」などがある。授業は、教室を使わないで研究室で行っている教員が多い。そのため、院生・学部学生と

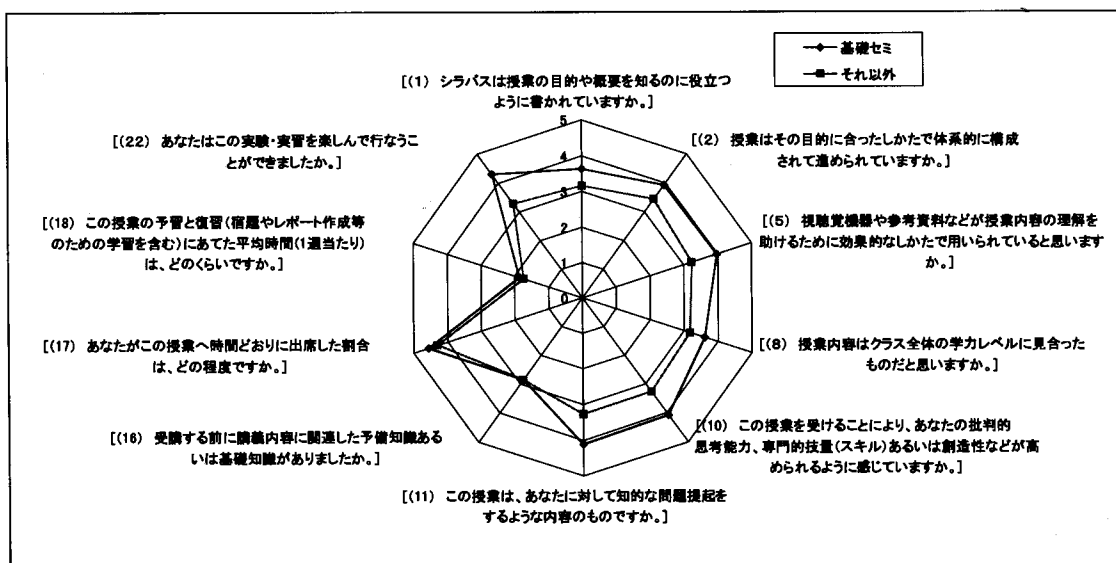
の接触を通して、勉学以外に受講生に様々な面で刺激を与える好結果となっている。

二番目の特徴は学生の履修方法で、ここでもユニークな方法を採用している。学生は受講を希望するセミナーを1つだけ選び、履修を希望する理由を詳しく書いた「履修希望届」を提出する。この届は担当教員に送られ、履修理由等から判断されて受講者が決定される。受講できない学生は、追加募集を受けることができる。一般的に、熱意をもって履修希望を書いておれば履修できていると判断している。また、ほとんどの学部で人間教育科目、基礎セミナー、特別科目の3科目から選択して4単位を

とるために、あまり不満は出ていないようである。

表2に学生による授業評価アンケート結果を示す。平成16年度と17年度2年間の全科目平均値と基礎セミナー平均値を比較したものである。アンケート22項目のうち10項目を選んで示した。全科目の平均値と比べて、基礎セミナーの評価はいずれも高い数値を示している。批判的思考能力の養成(10)、知的な問題提起(11)、楽しんで受講できた(22)等々で評価が高く、他大学のアンケート結果と同様に、大阪大学のアンケート結果からも小人数教育の卓越性・利点等を知ることができる。

表2. 学生による授業評価アンケート結果



(グラフ化は本センター松河秀哉氏による)

最後に、三番目の特徴として高大連携がある。この制度は平成13年度から北野高校を対象としてスタートした。現在、担当窓口は学部学務係で、学部等の事務は無関係である。手続きは、高校生を受け入れても良いというセミナー(1セミナー最大2名まで)を選び、これを高校側に通知する。高校は今年5校(大阪府立北野高等学校、大阪府立茨木高等学校、大阪府立槻の木高等学校、大阪府立豊中高等学校、兵庫県立尼崎小田高等学校: 昨年は3校)が参加しているが、高校サイドの選抜事務は北野高校に一任している。今年度の高校生参加人数は約50名で、主に2年生である。外大でも同様の基礎セミナーがあり、こちらも5校を受け入れているので、合併後は人数的にも増える見通しである。講習料についても、科目当履修生の場合1単位当たり14,400円であるが、高校生の受講は4,600円(2単位相当)と特別なはからいをしている。成績評価については、大学側は単位

としてではなく科目の終了証書を発行しており、高校側が最終的な判断をしている。今までのところ、基礎セミナーによる高大連携は、大変順調に進んでいると言えよう。

全体として、基礎セミナーは非常に上手く機能している。問題点は、逆に評価システムが十分機能していないことであり、この面での厳しい見直しが今後求められる。また、TAも共通教育実験や授業に配置するので手一杯であり、基礎セミナーまで配置できていないことも今後の課題となっている。

[註]

1) 北海道大学、名古屋大学、京都大学、長崎大学、東北大学の小人数教育については、12月7日(木)開催の東北大学の特色GPシンポジウム「大学における初年次小人数教育と「学びの転換」」配布資料による。

[参考文献]

- 1) 2005「理学部の新しいカリキュラム - 進化する理学教育プログラム」『創造と実践』(大阪大学 大学教育実践センター) 第5号

(やまなり かずあき 大学教育実践センター
教員研修支援部門・教授)

(はだ ゆみこ 大学教育実践センター
教員研修支援部門・助教授)